

<16-4・7 地区の調査>

調査の概要 16-4・7 地区は、近世の城下絵図によると東西に走る道路とその両側に位置する武家屋敷地にあたり、道路南側は2つの屋敷地にまたがっていたと想定できます。

遺構 江戸時代の遺構としては、道路、礎石、上水道、井戸、溝、土坑（ゴミ穴等）を確認しました。道路は調査区のやや北側で検出しましたが、砂利敷きの路面は近代の鉄道工事に伴って破壊され、部分的に残っていただけでした。

道路北側の屋敷地では、上水道、礎石、井戸、溝、土坑を確認しました。上水道には竹管が使われ、継手で管同士をつなぎ、方向を変えていました。継手は立方体の木材に孔をあけたものでした。建物関係の遺構として礎石や、底に礎石を据えた柱穴を確認しましたが、建物の規模が分かるほどには残っていませんでした。井戸は桶状の井戸枠を持つもの1基を確認しました。土坑は大小あわせて10基以上を確認し、その一つのからは獣骨が出土しました。

道路南側の屋敷地では、JR北陸線高架工事の際の調査（2000・2001年）に伴い、屋敷地を区画する溝を確認しています。今回はその溝の続きを検出することを期待していましたが、近代の鉄道工事によって破壊され確認できませんでした。

区画溝の想定ラインの北側屋敷地では、井戸、土坑などを確認しました。井戸は2基確認し、1基は桶状の井戸枠を持つもので（164-90）、もう1基は底部に板組みと板石組みの井戸枠を持つもの（164-167）でした。この井戸枠は最初板組みで作られていましたが、後に板石組みへ作り替えられ、その際に元からあった板組みを壊していました。

区画溝の想定ラインの南側屋敷地では、井戸、溝、土坑、石組遺構、通路、柱穴などを確認しました。井戸枠は残っていませんでしたが、桶状の井戸枠を抜いた痕跡を確認できました。土坑（167-137）は、平面形が方形で、底に扁平な笏谷石を敷いていました。石組（167-06）は周囲に円く笏谷石を並べ、その中が柱穴状になっていました。通路（167-25）は全長5m、幅約0.5mで両側に拳大の円礫を並べていました。

この屋敷地の南側は16-3調査区になり、そこで道路を確認しています。道路際には底に礎石を据えた柱穴が並んでおり、入口に関連した遺構と考えています。

江戸時代以前の北庄城期の遺構としては、道路に伴う側溝（164-109）、溜枡（167-156）を確認しました。

最後に近代の遺構として、蒸気機関車の入れ替え等に使用していた転車台の一部を検出しました。転車台の回転台坑部内部はコンクリートで土台を造り、外縁部には煉瓦を数段積んでいました。回転台坑にも煉瓦が敷かれており、その部分には円形軌条を支える枕木の跡が確認できました。

遺物 出土したもので多くを占めるのは、江戸時代の土器や陶磁器です。石製品・木製品・鉄製品等も出土しました。鉄製品には短刀があり、柄に鮫皮が残っていました。また、木製品には人形の頭部があり、目・鼻・口が墨で描かれていました。

（青木隆佳）



転車台（東から）



井戸 164-90（西から）



井戸 164-167（西から）



溝 164-109（東から）



石組遺構 167-06（北西から）



通路状遺構 167-25（東から）



土坑 167-137（西から）



溜枴 167-156（北から）

<16-5 調査区>

調査の概要 調査区は福井駅東口のすぐ前に位置します。近世の城下絵図によると、福井城本丸の東南方、通称「中之馬場」と呼ばれる曲輪のほぼ中央にあたり、間口が約 50～60mある上級クラスの武家屋敷が南北に2軒並ぶ場所と想定されます。両屋敷の住人は、最古の慶長 18 年（1614）の絵図では南は水戸氏、北は岸氏であったのが、正保期（1644～47）の絵図で一旦空き地となり、さらに万治 2 年（1659）の絵図では南は堤氏、北は松原氏の屋敷へと変遷しています。

調査の結果、近現代の攪乱によって江戸時代の生活面は大半が削られていたものの、部分的に遺存する面や土層の堆積状況から、生活面を3面確認しました。上から順に第1面は寛文の大火（1669）以後の造成面、その下約 10 cmの第2面は寛文の大火以前の江戸時代前期の造成面に比定できます。さらにその下約 10～20 cmの第3面では、北庄城期から江戸初期にかけての遺構を重複して検出しました。

遺 構 第1面の江戸時代中・後期の遺構は非常に少なく、流しと考えられる円形の石組遺構、玉砂利敷き面、溝などが調査区の南端部で見つかりました。

第2面の江戸時代前期の遺構は、主に掘立柱建物の柱穴群で、約 40 基の柱穴が南北約 14m、東西約 18mの範囲に広がります。どの穴も柱を抜き取った部分に炭や焼けた土が入り込み、寛文の大火で焼失した建物に伴うものと考えられます。

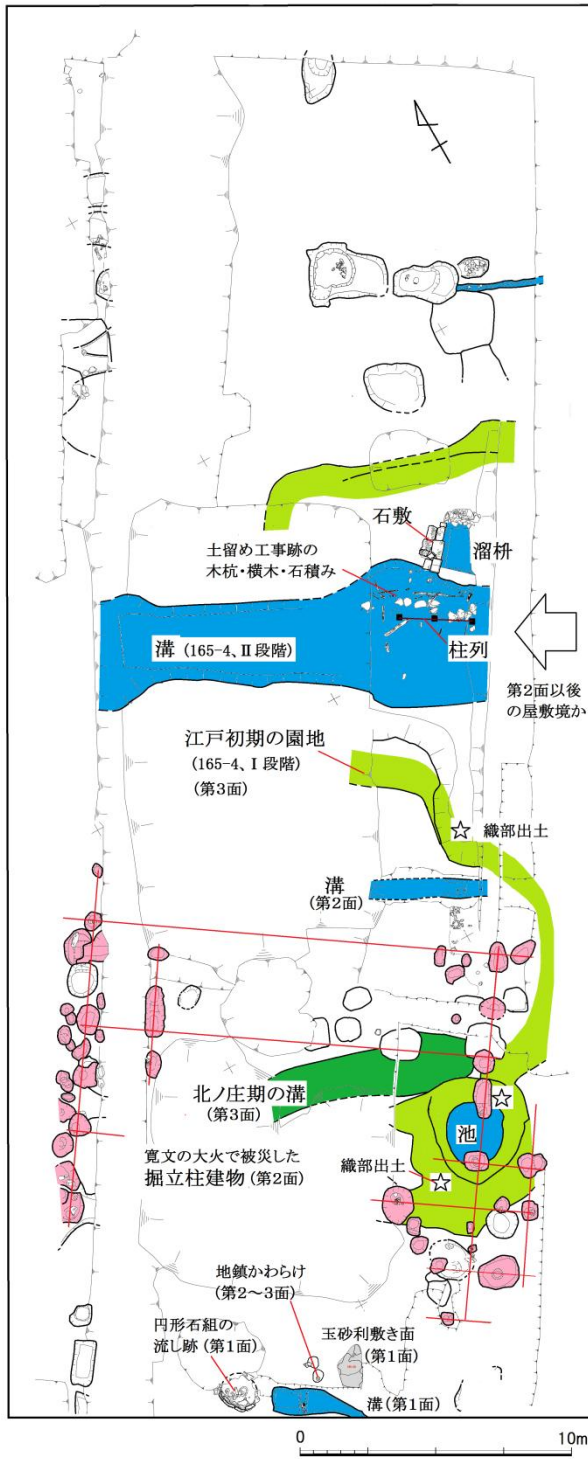
第3面のうち、江戸時代初期の遺構としては、調査区の東側で曲線状に落ち込む大型の園地遺構（165-4・17）があります。落ち込みの南側に池跡や導水路状にのびた溝、北側に石組みの溜枘が設けられ、笏谷石の板石敷き面が一部残存しています。北庄城期の遺構としては、南側池跡のすぐ北で東西に走る溝を検出しました。

園地遺構の北側の落ち込み（165-4）には、第2面の時期になると東西方向に溝が作られます。その後、南側から敷地を拡張するため溝の大部分が埋め立てられます。その土留め工事の木杭や横木、石積みなどが溝の上に帯状に広がっているのを検出しました。また、埋め立てた土層内に柱が3本立ったままの状態、約 2 m（1間）間隔で並んで見つかりました。柱は約 10×12 cm角で、上下別の部材が継ぎ足されています。屋敷外周の塀とも考えられます。

遺 物 出土遺物は、主に江戸時代の陶磁器や土師皿、石製品、鉄製品、木製品、漆器の椀などで、中でも江戸時代前期（17世紀）の遺物が割合多くみられました。この他、北庄城期の遺構に伴い、中世（16世紀）の陶磁器が少量出土しています。

貴重な遺物として、17世紀初頭の瀬戸窯の織部焼の向付が複数個体出土したことがあげられます。これは江戸時代初期に庭園を眺め客人をもてなす茶座敷をそなえた建物が存在したことが想定されます。

まとめ 当地区では、福井城築城当初の大規模な庭園を持つ屋敷跡を検出しました。城下絵図の記載から、住人は結城秀康の妻の弟にあたる水戸三七（江戸宣通）であることが分かります。水戸氏は「常陸江戸氏」の流れをくみ、結城氏ともゆかりの深い家で、当時の上級武家の高い生活文化の一端を垣間見ることができます。（櫛部正典）



園地遺構北側 (165-4) (北から)



園地遺構南側 (165-17) (西から)



園地遺構付近出土の織部焼向付